

池田草庵先生に学ぶ会

「姪盛小齋記」を読む 令和七年二月『池田草庵先生著作集』 P240～241

五月三日(祝日)学習分(担当・俊彦、左起子・恭子・梅井・藤原・宮崎)

### 姪盛小齋記(三)

不然則、歲月不<sub>レ</sub>留、駛如<sub>二</sub>弓箭<sub>一</sub>、一瞬息之間、忽焉  
向<sub>レ</sub>衰及<sub>レ</sub>老、空山落日、暮雨蕉窓、

読み

然らずんば則ち、歲月留らず、駛<sup>はや</sup>こと弓箭<sup>きゅうせん</sup>の如し、一瞬息の間、忽<sup>こつえん</sup>焉として  
衰に向かい老に及ぶ、空山落日、暮雨蕉窓

言葉

不然<sub>二</sub>シカラズ<sub>一</sub> しからず そうではない  
駛<sub>二</sub>ハセる<sub>一</sub> はやい 弓箭<sub>二</sub>キユウセン<sub>一</sub> 弓と矢  
忽焉<sub>二</sub>コツエン<sub>一</sub> すみやかなさま 突然 空山<sub>二</sub>クウザン<sub>一</sub> 物寂しい山  
瞬息<sub>二</sub>僅かな時間<sub>一</sub> 暮雨<sub>二</sub>夕暮れに降る雨<sub>一</sub> 蕉<sub>二</sub>窓<sub>一</sub>

訳

そうでなければ、歲月は留まらないで過ぎ、その速いことは弓と矢のようだ。  
たちまちのうちに、衰え老いてしまう。静まりかえった山には落日、暮れの  
雨が窓を打つ、

徒抱<sub>二</sub>枯落窮廬之嘆<sub>一</sub>者、直目前之事耳、  
至此豈堪<sub>二</sub>復回<sub>レ</sub>首<sub>一</sub>、予每豫念<sub>レ</sub>之、

読み

徒<sup>ただ</sup>枯落<sup>きゅうろ</sup>窮廬<sup>きゆうろ</sup>の嘆き抱くは、直<sup>ただ</sup>目前<sup>まへ</sup>の事のみ、

ここに至りて豈また首を回して堪えんや、予每豫これを念う

言葉

徒<sub>レ</sub>耳<sub>二</sub>たダ<sub>一</sub>(なる)のみ むだに  
枯落<sub>二</sub>コラク<sub>一</sub> 草木が枯れ落ちる 落ちぶれる 窮廬<sub>二</sub>キユロ<sub>一</sub> 貧しい家  
予<sub>二</sub>われ<sub>一</sub> 自分 あらかじめ 前もつて  
豫<sub>二</sub>あらかじめ<sub>一</sub> 与える あずかる

「補説」本来は「豫」と「予」は別字。

訳

ただ、落ちぶれて、貧しいくらしを嘆いているのは、直ぐ目の前のことのみ、ここにきて、またふり返って見ることに堪えることができようか。私いつもこのことを頭に置いている。

輒覺<sub>レ</sub>毛聳骨寒、汝今去<sub>レ</sub>我之年<sub>一</sub>尚遠矣、  
學無<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>及早、

読み

輒ち毛<sup>もうしやう</sup>聳骨寒に覚え、汝今我の年を去ること、尚遠しかな、學は早くを及ぶに若<sup>しく</sup>は無し、

言葉

輒<sub>レ</sub>すなわち 覺<sub>レ</sub>おぼえる さとる 毛聳<sub>レ</sub>モウシヨウ 毛が立つ  
骨寒<sub>レ</sub> (? 寒骨<sub>レ</sub>貧賤の身) 尚<sub>レ</sub>そのうえ  
去<sub>レ</sub>間が空く 時間が隔たる 若<sub>レ</sub>は無し及ぶものはない<sub>レ</sub>

訳

すなわち体中が寒さを自覚する、お前は、今我の年とは離れその上かなり離れている。学問はやくにするのにこしたことはない。

宜<sub>レ</sub>自戒而勉<sub>レ</sub>之、勿<sub>レ</sub>復效<sub>レ</sub>予之今日<sub>一</sub>、  
而予亦宜<sub>レ</sub>自戒、而無<sub>レ</sub>復貽<sub>レ</sub>衰老之悔<sub>一</sub>而已矣、

読み

宜しく自戒して之に勉めるべし、復た予の今日を效<sup>まね</sup>るなかれ、而して予も亦宜しく自戒して、衰老の悔を貽すこと無しにすべしのみ、

言葉

勿<sub>レ</sub>ナカレ してはいけない 效<sub>レ</sub>コウ ならう まねる  
貽<sub>レ</sub>のこす 而已<sub>レ</sub>のみ 而已矣<sub>レ</sub>ノミ 而已を強調した形

訳

自戒して、之に勉めるようにするのがよい。また、私の今日をみならってはならない。そして、私もまだよく自戒して、年取ってからの悔いを無いようするだけだ。

書此與汝、以爲他日之左券可乎、  
雖然、予自少年非不爲此言也、而遂有今日、

読み

此を書して汝に與え、以つて他日の左券と爲すべきかな、然かりと雖えども、  
予も少年より、此の言を爲ざるにあらざるなり、而れども遂に今日あり、

言葉

左券||契約を書いた木の札を二つに割つた左半分 約束の証拠  
然雖||そうではあるが 不為||なさず

訳

この書いたものをお前に渡すから、いつかの日の証拠としたらよい。そうは言  
つても、私も少年の頃よりこの言葉のようになかった訳ではない。しかし、  
とうとう今日がある。

則今日之言、亦猶或類夫少年一時之意興乎、  
予言而多懼矣、己酉初冬、草菴子病中把筆

読み

則ち今日の言、亦猶おそ或いは夫れ少年一時の意興の類か、  
予の言おそ而かれども、懼れ多し

己酉初冬、草菴子病中筆を把りて記す

言葉

意興||、  
懼||おそれ 心配

訳

己酉||ツチノトトリ 嘉永二年(一八四九 草庵三歳) 初冬||陰曆十月  
つまり、今日の言葉も、やはりなお少年の一時の思いつきに類するようこと  
あるか。

私の言葉には、危惧するところが多い。

嘉永二年初冬 草庵私は病の床にあつて筆を持って記す